

アンノウスカウト物語 (Unknown Scout)

— 名も知れぬスカウトの善行 —

1909年の秋のことでした。

イギリスの都、ロンドンは、この日も一日中濃い霧につつまれていた。

アメリカのイリノイ州シカゴからロンドンにきた出版業のウイリアム・ボイス氏は、道がわからなくて、こまりはてていました。

そのとき霧の中から一人の少年が近づいてきました。

「何かお役に立つことがありますか。」と少年は言いました。

事務所がわからなくて困っていることがわかると、少年は先にたって、その事務所までボイス氏を案内しました。

ボイス氏は、アメリカ人の習慣で、少年にチップをあげようと、ポケットに手を入れました。

しかしボイス氏がチップを取り出す前に、少年は勢いよく右手を上げて敬礼をしました。

「僕はボーイスカウトです。今日も何か良い事をするつもりでいました。

お役にたててうれしいと思います。スカウトは、他の人を助ける事でお礼はもらいません。」と少年はいいました。

少年からボーイスカウトの事を聞いたボイス氏は、用事をすませてから、少年にボーイスカウトの本部を案内してもらいました。ボイス氏が少年の名前を聞く前に、少年は姿を消してしまいました。

イギリスの本部でボーイスカウトのことをくわしく調べたボイス氏は、アメリカへ帰って大統領のタフト氏などに話し、やがて、アメリカでボーイスカウト運動が始められたのです。

その時の少年がだれだったのか、その後もわかりませんでした。

しかし、名前もわからないこの少年の小さな善行が、

アメリカのたくさんの少年に、ボーイスカウトを伝える元になったのです。